昭島礼拝 2020/9/6

聖書：ヨシュア 20:1-6
主題：逃れの町
賛美：

　みなさん、おはようございます。今日は赦しということについて、考えたいと思います。聖書は神様が私たち一人一人の罪を赦して下さっていると教えています。また神様を信じる私たちも人を赦せるようにと教えています。しかし人を赦すというのは、とても難しい事です。とてもひどい事をされたらなおさらのことです。そしてなんとなく思うのは、赦すことが人のためになるのか？ということです。悪いことは悪いと罰しなければ、人はいつまでも悪いことをするのではないかとも思います。今日はこれらのことも考えながら、ヨシュア記 20 章の逃れの町ということについて見ていきます。

　カナンの地での戦争が終わり、イスラエルの民はカナンの地をそれぞれ部族ごとに住む場所を割り当てていきました。先週はイスラエルの 12 部族の割当地を見ました。その時に、イスラエル 12 部族の中にレビ族が含まれていないことをお話しました。神様はレビ族を祭司として任命し、特別な扱いをされています。レビ族には、割当地はないのですが、カナンの全域にわたってレビ族のための町がいくつか設けられ、その中に住むことになります。ヨシュア記 21 章には、イスラエル 12 部族それぞれの割当地の中から、レビ族が住むための町が選ばれています。全部で 48 の町が選ばれました。レビ族はこうして、イスラエル全域に住むことで、国全体で祭司としての役目を負っていくことになります。例えば、イスラエル人の誰かが何か神様にお祈りしたいことがあって、レビ族の誰かに一緒に祈ってもらいたいと思った時、今まではみんな一緒に住んでいたのですぐにレビ族に会いに行けました。しかしこれから広いカナンの地でバラバラに住むことになった時、幕屋はしばらくシロに置かれ、その後エルサレムに神殿ができます。もしレビ族がみんなシロの町に住んでしまいますと、誰かがお祈りしたいと思った時、シロまで行かなければならなくなります。それは大変です。そこで神様はレビ族をイスラエルの各地に散らばって住むようにされました。誰でもレビ族に一緒にお祈りしてもらいたいと思った時、すぐに行けるようにです。またレビ族は人々に神様の律法を教えることもしました。ですから、レビ族がイスラエル各地に散らばって住むという事は、現代で言えば、それぞれの町に教会が建てられてそこに牧師や伝道師が住んでいるようなものです。そうしてどこに住んでいる人であっても、近くの教会に行くことができるということです。

　章が前後するのですが、21 章でレビ族の町が割り当てられました。そして今日読んで頂いた 20 章では、逃れの町という町が選ばれています。6 つの町が逃れの町に選ばれていますが、すべてレビ族の町です。48 あるレビ族の町の内、6 つの町が逃れの町として選ばれています。先週、見て頂いたカナンの地を 12 部族で分割した地図をもう一度見ますと、逃れの町として選ばれた 6 つの町が書かれています。ヨルダン川の東側の上から行きますと、ゴラン、ラモテ・ギルアデ、ベツェル。それからヨルダン川の西側の上から、カデシュ、シェケム、ヘブロンです。2 つほど、正確な場所がまだ分かっていない町もありますが、大体、カナンの地の全域に渡って、バラバラに配置されています。レビ族の 48 の町がバラバラに散らばっているのと同じ理由で、イスラエルのどこからでも行きやすいように、配置されています。

　今日読んで頂いた聖書箇所には、逃れの町は何のための町なのか説明されています。20:3 には「意図せずに誤って人を打ち殺してしまった殺人者が、そこに逃げ込むためである。血の復讐をする者から逃れる場所とせよ。」と記されて

います。また 20:5 には「たとえ血の復讐をする者が彼を追って来ても、その手に殺人者を渡してはならない。彼は隣人を意図せずに打ち殺してしまったのであって、前からその人を憎んでいたわけではないからである。」と書かれています。つまり故意にではなく、誤って人を殺してしまった者が逃げ込むための町であるという事です。逃れの町については、民数記 35 章にはさらに詳しく書いてありますので、ぜひお時間の空いた時に読んで頂ければと思います。短く簡単に説明しますと、当時の世界では家族の誰かが殺されてしまった場合、残された家族が復讐しても良い事になっていました。これは聖書の、神様の価値観というよりは当時の世界の常識です。むしろ、殺された家族の無念のために復讐する義務があるというくらいの考え方だったと思います。このような正当な復讐の権利を持つ人のことを血の復讐者と呼びます。家族の血の代価を、殺人者に償わせるということです。ところが故意にではなく、誤って、事故のようにして、人を死にいたらせてしまうこともあります。過失致死ですね。殺してしまった本人は自分は殺そうとしたんではないと分かってはいても、他の人は分かりません。また殺された人の家族はそんなことは分かりませんし、大きな喪失感と悲しみによって、殺してしまった人を憎みます。ですからそのような場合、血の復讐者は殺してしまった人を追ってくるのですが、殺してしまった人は逃れの町に逃げる事ができるという事です。そしてそこで安全に正しいさばきが行われるのを待つことができます。警察によって身柄を保護されるようなものです。ただし、故意に人を殺している場合は逃れの町に逃げて来ても、その血の責任を負わなくてはなりません。この逃れの町という制度は、神様が殺人を認めているとか、どんな殺人でも赦されるということではなく、正しいさばきが行われるために必要な措置であるという事です。そして不必要な復讐が行われて、復讐が復讐を呼ぶ連鎖を避ける為です。そのような非常にデリケートな面がこの逃れの町の制度には表れています。神様は人のいのちを大切に思っておられます。ですから決して殺人を許可することはありません。十戒にも「殺してはならない」とはっきり記されています。しかし故意に殺してしまったのではない人が復讐されることも望んでおられません。

これらの逃れの町がレビ族の町であるということにも注目したいと思います。レビ族は神様と人とをつなぐ大事な役目を負っています。人を殺してしまったという大きな罪、それがたとえ事故であっても、それは大きな間違いであることは確かです。その償いと悔い改めのために祭司は、この殺人者のために神様にとりなしの祈りをささげ、贖いの儀式を行うでしょう。しばらくの期間、その人は逃れの町に留まります。20:6 にはその時の大祭司が死ぬまでと書かれています。これは要するに、何日という単位ではないですね。年単位でしょう。それ位の期間、レビ族は彼のために祈り、また亡くなった人の家族のために祈り、償いをするのだと思います。そして神様からの赦しと恵みを受け取ってまた社会に復帰していくのです。償いと回復のためのミニストリーが逃れの町では行われるのです。

今日は最後に赦しという事を考えたいと思います。この逃れの町が示す神様の教えは、大きく言えば赦しという事に関係していると思います。人のいのちを奪うような大きな罪は赦されるのでしょうか。神様は聖書を通して、人がどのような罪を持っていたとしても赦されると述べています。ヨシュア記において神様は血の復讐者の権利を認めておられます。故意の殺人であれば、その血の償いをするようにと書いています。これは神様が人のいのちの重みを誰よりも尊重しておられるからです。だれも、どんな理由で合っても、決して人を殺してはならないのです。しかし神様は逃れの町を設けられ、また新約聖書においてはこのようにも仰っています。ルカ 17:3-4 を読みます。「あなたがたは、自分自身に気をつけなさい。兄弟が罪を犯したなら、戒めなさい。そして悔い改めるなら、赦しなさい。 4　一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回あなたのところに来て『悔い改めます』と言うなら、赦しなさい。」あなたがた

は兄弟を赦しなさい。一日に七回罪を犯しても、七回悔い改めますと言うなら赦しなさいとイエス様は言われました。これはもはや回数の問題や、程度の問題ではなく、あなたがたはどんなにひどい事をされても赦す事を目指しなさいということです。もはや復讐を果たそうとか、その人の更生のためには多少の罰を与えた方がとかそういう次元の話ではありません。赦しには全く新しい発想が求められます。それは正しいさばき主に委ねるという事です。ローマ 12:19 にはこう記されています。『愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。』神様が正しく裁いてくださるので、神様に全ての復讐する権利を委ねることが教えられています。逃れの町の教えは正しいさばきを待つという事を教えます。殺してしまった人も、家族を殺されてしまった人も、自分で解決しようとするのではなく、正しいさばきを待つのです。神様は全てをご覧になっておられて、正しいさばきを行って下さるからです。神様は私たちの全ての行いをご存知です。私たちの全ての罪をご存知です。その上で、神様はイエス様の十字架によって正しいさばきを行い、私たちに赦しを与え、いのちを与えて下さいます。罪のさばきも人間の基準では公平にならないかもしれません。しかし神様は正しいさばきをなさいます。また更生させることも、人間の力では不十分かもしれません。しかし神様は人の心を造りかえる事ができるお方です。その神様に全てを委ねることが大事です。自分もまた神様から大きな赦しを頂いていることを自覚し、神様の力を信じ、委ねていくことで、人を赦せるようになります。どうか私たちが神様の愛によって互いに愛し、赦し合う事ができますように祈っていきましょう。

ローマ 12:19　自分で復讐してはいけない。復讐は神にあり

ルカ 17:4　一日に七度来ても、七度赦せ。

ルカ 6:37　さばきは神様にある。